

シルクロード・砂漠を越えた冒険者達

陽光新聞社・顧問 塩澤宏宣

私にとって中国を見る視点は東の日本から西の中国、「日の出ずる国から日の没する国」というのが常識でした。ところが先日、面白い本を見つけました。表題がその本です。著者はフランス人ジャンピエール・ドレージュです。本題は「マルコ・ポーロと絹の道」だそうです。

マルコ・ポーロは「東方見聞録」で有名ですが、西欧人が見た中国について、改めて興味が湧いてきたと同時に、自分の「単眼」を恥じる次第です。

紀元前1世紀、ローマ人は西アジアのパルディア王国を通じて神秘の布、セリカ(絹)を知りました。絹はたちまちローマの貴族の間に広まり、絹を買う

ために膨大な出費で、一説ではローマ滅亡を早めた原因だといわれています。その絹は当時の漢帝国が北方の匈奴に献上していたものが中央アジアの遊牧民の月氏など、異民族を経由して流れていたようです。

この絹の流れが、やがて中国の中央アジア進出や西洋、インドとの交易に進展しました。やがて中国は中央アジア諸国を服従させることに成功します。中国は中央アジアへ金や絹を、中央アジアから中国へ真珠・犀の角・翡翠・馬などが贈られました。

紀元97年、中国は大秦(ローマ帝国)に使節団を送ります。しかし、東アジアと西欧諸国との貿易を独占していたパルディア人は、直接貿易をされることを恐れて妨害します。そこで中国は陸路の交易をあきらめて海洋貿易に転換。紀元166年、皇帝アントニヌスはローマから紅海を横切り、ペルシャ、インド経由でトンキン(現ベトナム北部)に使者を送っています。

交易路として発展したシルクロードは、仏教伝来の道でもありました。紀元前1世紀には、このシルクロードを通してインド巡礼の旅が盛んになり、天竺紀行を残した法顕や膨大な経典を持ち帰った玄奘三蔵が有名です。

漢の時代には儒教と道教が満遍なく普及しており、

仏教の普及は遅々として進まなかったようです。道教から用語を借用し、信徒に馴染みやすい実践を提唱するなど、いろいろ工夫をした結果、中国仏教が完成しました(私は儒教や道教は思想・哲学であり、いわゆる今日の宗教とは考えていません)。

中国における仏教は、在留外国人、商人、使節、人質、亡命者などの間で広まったそうです。仏典の翻訳はスキタイやインド人によりました。6世紀(唐代)にはいり、玄奘は様々な解釈が生まれてきた仏教の先行きを考え、原点を探るべくインド巡礼を志願しますが許可が下りません。そこで玄奘は629年1人こっそりと旅立ちました。その後10年間インドを旅して、数多くの経典、仏像、仏舎利などを持ち帰りました。

帰路はインダス川を渡り、ヒンズークシからワハン谷を経てタシュクルガンに帰着するオアシス路を利用しました。唐末期の843年武宗帝によって廃仏令が出されて中国仏教は衰退期にはいります。同時に中央アジアとの関係も希薄になり、ベトナムは独立し、北と西の諸国からの脅威も増大します。

この間、遣唐使や留学僧によって中国仏教が日本に導入され、同時に中東・西欧の文化が中国というフィルターを通して日本へ伝えられたということは意義深いことといえるのではないのでしょうか。シルクロードの終着点は日本の奈良・京都ということを実感します。

中国には仏教の他にゾロアスター、マニ、キリスト教など異国の宗教がペルシャから移入されました。ゾロアスター教はペルシャで起こりササン朝ペルシャの国教でした。6世紀には華北に拝火教の名で伝わっています。7世紀には長安や洛陽ばかりでなく、敦煌やシルクロードのオアシス都市にも寺院が建てられています。マニ教も7世紀末には中国に伝わり、仏教や道教の諸要素を取り込み「光の宗教」という名で定着しました。

キリスト教(ネストリウス派)はペルシャ、インドを経て中国に伝来し、唐の太宗(598～649)によって保護されましたが、その後の廃仏令によって急速に勢いを失いました。中国という多民族国家に宗教を定着させること(政治利用)には無理があるのでしょうか。しかしネストリウス派は方向転換して布教地を中央アジアからモンゴルへ移します。この作戦は見事に当

たり、13世紀、モンゴルによる中国制覇時には華北一帯に復興します。大ハーン一族にはネストリウス派の信徒が多くいたといわれます。ところで、モンゴル人とキリスト教、ちょっと違和感を覚えませんか。更にそこにあのマルコ・ポーロが関係します。

海路の発展により、中国と中東の貿易は新たな局面を迎えます。羅針盤や航海図が作られ(中国の発明)、帆船がインド洋やペルシャ湾を行きかうようになります。中国の貿易港には外国の商人が進出しました。その結果、陸路のシルクロードは勢いをなくしました。

しかし13世紀前半モンゴル帝国が勃興し、中国を支配します。西欧へ侵略しますが、同時にアラブ人やキリスト教徒の商人のためにシルクロードを確保します。1260年、2人のヴェネチアの商人(ニコロとマッフェオ・ポーロ)が偶然にもフビライ・ハーンに接見する機会を得ます。フビライは兄弟にキリスト教国について熱心に質問します。兄弟がヴェネチアに帰国する時、フビライは教国にキリスト教に精通した学者を100人派遣するよう書簡を託しました。折悪しく教皇の交代が長引き、フビライの書簡を渡すことが出来ずに2年が過ぎます。未だに決まらないまま、兄弟は再びフビライのもとに行きます。今回はニコロの息子マルコ(17歳)が同行。マルコにとって、この旅は(1271～1295年)まで続く25年間のドラマの始まりとなります。

ヴェネチアを出発し、パミール経由でカシュガルに。タクラマカン砂漠を通過してホータン、ロプノール、敦煌を経て華北(北京)への旅は3年半を費やしました。フビライの要請であったキリスト教の教義に詳しい学者は同伴できなかったのですが、教皇からの信任状と書簡、そしてエルサレムの聖油が届けられました。

ニコロとマッフェオ兄弟はその後、カンブシオ(現甘粛省甘州)へ行き、商取引に従事したようですが、マルコは大ハーン・フビライの信任が厚く、フビライの使節として各地に派遣され、外国人の監視や税の徴収を監督するなどの業務をしていました。マルコは4種の言語に精通していたといわれます。キンサイ(杭州)には何度も派遣され、インドまで行ったそうです。ヤンジュウ(揚州)統治では3年間も滞在しました。その他北京・長安・成都やチベット・雲南にも行きました。

後に記した「東方見聞録」によれば、マルコは中国を「華北」と「華南」に分け、それぞれが別の国だと思っていたようです。華北は契丹を指し、華南は一般的に言われている「シナ」のことです。華北と華南すべてがひとつの国であることが認識されたのは17世紀に入ってからです。マルコがモンゴル帝国で注目したことが2つあります。

そのひとつは「紙幣」について。桑の木から作られた紙に木版で印刷し、大ハーンの印璽が押されることで、その紙が金や銀と同じ価値を持つ紙幣になることです。兌換紙幣の先祖です。もうひとつの注目点は「駅伝・宿場」の組織です。ハンバリク(ハーンの都市)つまり現在の北京から全地方へ向かう道路が完備され、1万以上の宿駅があり、命令伝達以外に旅行者の承認、役人の視察などの公務に就く人々の宿が完備され、各宿駅には馬が400頭も用意されていたこと。宿駅は20～30マイルに一駅ずつあったといわれています。

やがて望郷の想いが募ってきます。ハーンに帰国願いをしますがなかなか許しが出ません。やがてチャンスが来ます。タタール領主(イル・ハーン家)アンゲンのハーンから「亡くなった王妃に代る王女を送って欲しい」との要望が来ました。ハーンはマルコを呼び「王女をアングルまで送り届けよ」と命令し、帰国を許可しました。4本マストの大きな船が14隻も準備されていたそうです。ハーンとマルコの関係が想像できます。

マルコは父と叔父の3人で海路泉州から3ヶ月かけてスマトラへ、更に18ヶ月かけてアンゲンへ到着。その後は陸路に変えてトルコを経由してコンスタンティノープルを回ってヴェネチアへたどり着きました。都合3年以上かけての帰国でした。25年のドラマは終わりましたが、帰国時には母国の言葉を忘れていたといわれています。

1298年ヴェネチアはジェノヴァと戦い負けてしまいます。マルコはジェノヴァに囚われてしまいます。幸運にも獄中でピサのルスティケロと出会います。彼は優秀な宮廷作家です。「騎士物語」を残した事でも有名です。この2人の出会いによって「東方見聞録」が誕生したのです。マルコ・ポーロは1324年、妻と3人の娘に看取られ、ヴェネチアで世を去りました。